# 選外佳作

この先に宇宙がどれだけ拡張し続けていても学校は嫌　（二）　大阪　坊　真由美

十の目に見守られつゝ大き西瓜切れば噴き出す太陽の赤　（九）　広島　家島　晶子

路地裏の角を曲がると現れる小さな神の小さな鳥居　（十九）　東京　福良　椋

馬鈴薯が発芽している静けさを元気な家族は誰も知らない　（四七）　広島　山田　典彦

ひとサイズ大きいテレビに買い換えてあなたの知らない吾が年取る　（八八）　山口　伊藤美紗代

どこまでが許されてゆく距離なのか積乱雲のあとに降る雨　（九〇）　群馬　篠原　香代

気の利いた台詞も言えずお芝居のト書きのように生きる不器用　（一一五）　埼玉　髙田　明洋

エレベーターか階段か一瞬迷う吾を防犯カメラきっと写した　（一四〇）　山口　西村　博子



苦しいからもう少し生きてみようかな　石蕗咲きて冬の陽こぼる　（二〇八）　福岡　岸原　修

金柑を捥がずにいるは鵯よおまえにあげるつもりにあらず　（二三三）　山口　近藤　順子

銀の涙のごときかたちして父の骨より解かれしボルト　（二三六）　広島　若林美知恵

芽よ、おはよう。茎よ、葉つぱよ、こんにちは。多の緑はひかりをあつむ　（二七七）　山口　藤田　淳子

米粒の形をなせる山手線胚芽の跡にとげぬき地蔵　（二八三）　愛媛　大賀　康男

パーマかけても行くとこないと美容師に言えば間をおき「病院は」と言う　（二八九）　山口　原田　雅子

一族がまるてえぶるにそろふ夏「湖林」の締めのお焦げがじゆつと　（三二四）　東京　涌井ひろみ

切なさに耐へかねていま辞書を繰る運命といふ日本語の意味　（三三五）　広島　下垣内和子

幼な名にわれ呼ぶ人が今もゐるポンポンダリアの群るるふるさと　（三六九）　京都　赤岩　邦子

斎場へと孫のバイクの先導に霊柩車はゆく新緑の中　（四〇三）　山口　難波　文惠

父似だと兄は羨むように言う私の知らない征きたる父よ　（四四六）　京都　鯵本ミツ子

口ふたつあるレトロな醤油差し片側からは未来が流れる　（四六二）　山口　磯谷　祐三

電停の「シュウダイソウキョウチュウコウマエ」ぼくのリハビリに使えそうだよ　（五一二）　広島　徳田　義幸

声を殺しても生きてはいけるけど光り続けるマイワシの群れ　（五四五）　神奈川　森永　理恵

大人しく見守るはずのインターハイ「集中」と叫びぬコートの孫に　（五四七）　山口　山縣満里子

隙間なくテレビ売場に並んでる画面の大谷一斉に打つ　（五五七）　千葉　伊沢　玲

小柱の小鉢をつつくあの人の腫瘍はちょうどこの大きさか　（五七〇）　広島　木野　葛紗

母がくれたぬいぐるみ汚れてきたけれど元の白さは忘れていない　（五七二）　愛媛　川又　郁人

古稀過ぎて洗礼受けし片肺のちちはロザリオをわれに遺せり　（五八二）　千葉　黒岡美江子

チャンネルを変えても変えても式典の、孫には初めてひろしまの六日　（六一五）　広島　上條　節子

たっぷりとスマホに潜る子どもらの息継ぎのようなカレー　おあがり　（六三三）　滋賀　福永　昭子

もうすぐだ病のわたしに朝が来る四時二十分の貨物列車過ぐ　（六三八）　広島　山口　泰子



# 第四十回
# 宮島全国短歌大会作品集